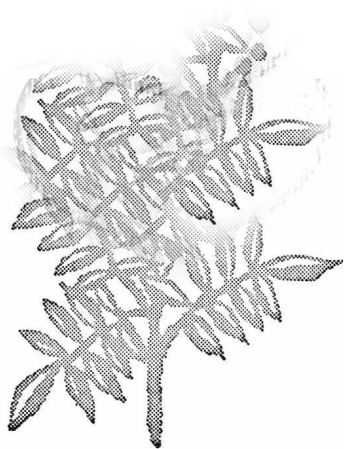


隨筆集

多摩川断想

島村利正



花曜社

隨筆集多摩川斷想

定價二三〇〇円

昭和五十八年十一月十五日 初版印刷

昭和五十八年十一月二十五日 初版発行

著者 島村利正

発行者 林 春樹

発行所 株式会社 花曜社

東京都新宿区矢来町三十五番地 郵便番号一六二

電話 東京〇三(二〇七)九七八一

印刷 信毎書籍 製本 東京美術紙工

© T Shimamura, 1983. ISBN4-87346-043-3

隨筆集「多摩川斷想」目次

I

志賀さんと伊那高遠

犬 山

奈良歩き

はじめての旅——浅間温泉

初心の雪

近江路

師走の回想——潮来、犬吠埼への旅

II

奈良の思い出

香 薬 師

奈良断想

終戦の日の空

潔し武人夫婦の心情

61 58 55 52 46

40 34 31 24 21 16 10

昭和はじめの奈良地図

ふたつの会

多摩川断想

銀座断想

近隣有情

小説の素材と旅

奈良の宿

典雅な唐招提寺鼓楼

賞とわたし——読売文学賞

Ⅲ

春の足どり——少年時代のある伊那谷

一本の松

信州の馬刺し

望郷記

絵島の遺品

118 112 109 105 102

98 95 91 86 82 77 74 69 66

「山国」の思い出——平林賞受賞に際して
ふるさと回想

伊 那 路

IV

信濃三峰川の思い出

天龍の鮎つり

多摩川荒廃

アユ釣り……心の息抜き

鮎つり談議

鮎つり解禁

V

古美術の写真——飛鳥園・小川晴暘さんのこと

志賀直哉と網野菊

伊藤整氏と阿佐ヶ谷会など

172 165 162

156 152 147 144 141 138

131 127 123

師と私と——瀧井孝作氏

ナイルの水

最後の葉書

「酔いざめ日記」の木山捷平

平林さんの激励の葉書

三浦哲郎氏の初印象

心のこり——和田芳恵

網野さんを悼む

小沼丹氏の作品と風貌

聖なる影——上林曉追悼

志賀さんのやさしさ

解 説

島村利正著作目録

初出一覧

装
幀

山
高

登

隨筆集「多摩川斷想」

I

志賀さんと伊那高遠

しばらくぶりで新宿から汽車に乗った。故郷にいる老父母を見舞いかたがた弟にも用事もあり、また別なこと、心のどこかに常にひそんでいるもう一つの願い、それは白雪がかたるあの厳しい冬の岳々に、密かに接してみたいためでもあった。

私の生れた伊那の高遠には、十五の時までしかいなかったのだが幼少のころ故郷の町から仰ぎみた二つの峻岳、仙丈と木曾駒の哀しいまでに美しい威容は、心底に強く焼きついていまだに消えたことがない。身辺俗務に趁われるまま偶の機会にしか減多に帰郷もせず高遠の桜にも久しくお目にかからないが、瀧井孝作先生に鮎釣りを教えられて、夏のその時期だけは童心に還り、川と共にふたつの岳に抱かれる。

汽車の窓から暫く窓外の風景をみながら、高遠のことをいろいろ思いうかべた。すぐの弟が戦死したとき、伊那町の叔母のところへ嫁した姉が死んだとき、老父母の喜の寿の祝い、佳い

ことも悪いこともある。そのなかでこの中央線を志賀直哉先生とふたりで高遠まで下っていったことは、忘れることの出来ないことだ。

昭和二十年の六月三日、終戦直前のことである。八王子にいられる瀧井先生のお宅へ、志賀さんと一緒に泊った。八王子始発の五時の汽車に乗るためであった。その夜もどこかの都市が空襲されていたが、食物といえば馬鈴薯か、魚ではホッケぐらいしか手に入らない時期に、その夜の瀧井家の晚餐は、まことに心のこもった温かいものであった。鮎の料理である。鮎の煮びたし、塩焼鮎の味噌汁等々、志賀さんは白い髭を綺麗に刈りこまれて、葡萄酒ですこし頬を赤らめられ、

「うまいねえ」「信州は朝晩まだ寒いのかしら……伊那はまったく初めてだからねえ」
など云われ、空襲のことも暫く忘れて機嫌がよかった。

志賀さんが疎開のことを本気で考えられ出したのは、三月九日夜の、本所深川大爆撃のころかも知れない。政治家や有名人はいち早く要領のいい疎開をしていたが、志賀さんはそんな手回しのいいことは出来ない様子であった。お宅が世田谷新町で街なかではないので、ある意味で暢気に構えていられたのかも知れない。小田急、狛江にある私の妻の実家に、牛車一台の荷物と、梅原さん、安井さんの絵二点を疎開しただけ。伊那の高遠を志賀さんの疎開先にきめることについては、瀧井先生と下相談して準備した。前年の新潮十月号に載った私の四十枚の小

説「仙醉島」は、高遠の実家のことが題材になっているので、その小説を改めて志賀さんに読んで貰った。気候も峻烈な高遠のことを手取り早く解って頂けると思ったからである。志賀さんは十月にはもう早い炬燵の出来るといふ箇處へ傍線を引かれたりした。また

「この鞆の浦は浦ではなく鞆の津だよ」

と間違ひなどを訂正された――

その夜、瀧井家の奥の部屋へ志賀さんお独り、私は瀧井先生の書齋へ、茶の間に瀧井家一同という風に分れて、寝間にも心が配られた。八王子もいつやられるかも知れないが、今夜は無事に、そして明日からの旅行中は平穩に、そのことばかり祈って浅い眠りに落ちた。

五時の汽車は始発だけに、予定した通り空いていた。志賀さんは中型のリュックサックに将校用の提げ鞆、洋傘、水筒を持っておられた。革脚絆は網野菊さんから貰われた由であったが、それはつけなかった。志賀さんのリュックのなかにはお米少々と鏝節一本（汽車が立往生したときにはこれを噛むのだと云っておられた）その他旅行用の小道具が入っていた。また昨夜見せられた瀧井先生のお嬢さん、新子ちゃんの見事な絵も記念に入った。私もリュックを背負い、ゲートルを巻いていた。志賀さんは芸術院会員で二等のバスを持っていられたから、汽車の旅は具合がよかった。私の三等赤切符は、瀧井先生のところまで苦心して買って下さったものだ。駅まで瀧井先生や新子ちゃんの御見送りをうけて、汽車は動き出した。二等車と一緒に乗り

こんでいい席にまず落着いたが、浅川を過ぎる頃、車掌が志賀さんと知ってか識らずか、一礼して通り過ぎると、志賀さんは、

「どうもまずいね、気になるね、君の三等の方へ行こうよ」

と言われて、気軽に席を立たれた。三等車もうまい具合に空いていたが、景色のいい左側の席はとれなかった。

志賀さんの御顔は老来ますます御立派で、亡くなった武田麟太郎さんが、

「志賀しゅんせ（武田さんの口ぶり）ほど立派な顔、みたことないな、あんまり立派で女のひとなんか反って近づけんのやないか」

などと云っていられたが、しかし、志賀さんは気さくで、若い者の面倒も気軽にみられ、また竹馬の背なか乗りもするような茶目気もあって、汽車の窓から飛去ってゆく山野を眺めながら、

「里見の小説にこの与瀬の駅が出てくるのがあってね、主人公が自殺しようとしてこの駅を通る時に駅員が与瀬、与瀬って呼ぶのでそれを思い止まった話なんだが、ところがそのころにはこの与瀬の駅がなかったという事実が判ってね、里見はひどく弱っていたよ」

志賀さんは眼をくるくると動かして子供のように笑われた。

甲府盆地、韭崎を過ぎて信濃路に入ると、新緑の山々が一層美しく見えた。私は一時泉鏡花

の小説にも心酔したことがあって、けんらんたる鏡花の文学と簡潔で勁い志賀さんの文学との対比などについて生意気に話したりした。志賀さんは常に微笑まれ、随筆「泉さん」に出てくる鏡花のことを話されたりした。諏訪を過ぎ辰野で飯田線に乗換えるのであるが、そこではじめての障碍にぶつかった。飯田線の切符が買えないのである。長蛇の行列に並んで二時間あまり長身の志賀さん、腰をおろされる場所もない。漸く伊那町へ着くと天龍河畔にある叔母の家に寄って、瀧井家で行くつて下さった弁当をひらいた。伊那町にはほかに、伊那木材の社長をやっている金沢恵二郎という有力な親戚もあって、志賀さんがこの辺の土地を気に入られたなら、疎開の家一軒ぐらい必ず探し出せる自信があった。

伊那町から高遠まで二里の道を走るバスも長時間待たされ、その上超満員で苦痛であった。次第に山が深くなり、こんなところに町があらうかと初めてくる都会人は心細くなるそうである。私は志賀さんの横顔を見ながら心配した。今度の旅行は町の有力者にも知らせず、自然のかたちで伊那の谷を見て頂きたかったのだが、矢張り町の人々にも知らせ、乗物の手配などして貰った方がよかったかと思ったりした。私の実家は町の真ん中で、商家である。老父母と弟の嫁が未亡人になって子供ふたり抱えてやっている。志賀さんを迎えて、家の者はみな間諷ついている態だった。以前は京都風な中庭があって、巨きな松の木一本、その向うに蔵が四つあるのだが、子供が多くなってその中庭をつぶし、一部を建増した古い家。